

## 終戦後に刊行された

### 農業協同組合の文献

終戦までの協同組合の文献については、東畑精一教授がその著書「協同組合と農業問題（改訂版）の巻末附録に「協同組合研究の葉」として精彩な學問的筆致をもつて紹介されている。終戦前の協同組合の文献案内としては、これにまさるものはないであろ

う。したがつて、ここでは終戦後、わが國で刊行された文献をこれにつけ加える意味で（農業協同組合にかぎつて）以下紹介をこころみてみる。

文献の内容によつて(1)組合一般理論、(2)組合經營論、(3)組合實務論の三部に大別する。(2)の組合經營論は組合一般理論の現實への適用あるいは組合實務論の綜合という兩者のくみあわされたかたちで論述されているから、兩者（一般理論と實務論）のうちどちらかへ接近し、その區別が判然としなないものがある。この分類では、これを狹義に解しておく。

#### 一 組合一般理論

- 東畑 精一著 協同組合と農業問題  
近藤 康男著 協同組合原論  
奥谷 松治著 協同組合論  
井上 晴丸著 日本協同組合論  
新井 義雄著 農民組合と農業協同組合  
吉川久衛共著 農業協同組合要論  
車田 篤共著 農業協同組合概論  
國弘 員人著 協同組合概論  
兒島 俊弘著 土地と農業協同組合  
武藤 三男著 開拓地に於ける農業協同化の理論と實際  
農村問題研究会編 農業協同組合の課題  
組合一般理論の著書としては以上のものがあげられる。右のうち前半の東畑、近藤、奥谷、井上四氏の著書は、戦前昭和七、八

年から昭和十二、三年にかけて産業組合運動のもつともおう盛な時期に公刊せられたものの改訂版である。この四者は、いろいろな意味からみてそれぞれの關連性をもつて生れてたものであつて、そのきつかけを與えたものは東畑教授の「協同組合と農業問題」(昭和七年)である。それまでの、わが國の協同組合の文献は「正に良い意味の宣傳書であり教科書であり解説書であり案内書であるのを常とした」(同書附録の「協同組合研究の榮」より)。本書は協同組合を國民經濟的な觀點からとらえ、社會科學の一分野として協同組合の研究をとりあげた最初の文献である。それは、昭和六、七年頃の産業組合が農山漁村更生運動(政府の支持)によつて國民經濟運動の前面におし出され、また一方には反産運動として中小商工業者の社會問題が擡頭してきたときの時代的要求にもとづいてうまれた學問的勞作である。この勞作を土臺にして、協同組合に對する國民經濟學的な研究の關心が急激にたかめられたのである。その一つの現れは近藤教授の「協同組合原論」(昭和九年)である。近藤教授がその序文のなかにもいわれているように「本書に於ける協同組合の本質に關する見解の重要な部分(同書)——協同組合と農業問題——の批判の形式をとつている。同書がなかつたならば本書は生れなかつたかも知れない。かかる意味において東畑教授に負ふところ最も大である」と。

近藤教授の「協同組合原論」は協同組合の能力およびその主要なる任務を流通過程の合理化——商業利潤の節約におかれ、流通協同組合理論を確立された著書であつて、協同組合の近藤理論と

して、流通協同組合理論を一般に定式化し、普遍化したものである。そして、後の二書、奥谷氏の「協同組合論（昭和十年）井上氏の「日本協同組合論」は、この近藤教授の著書に刺戟されて生れてたものである。奥谷氏は、その序文に「本書における理論的構成は、主として近藤康男氏の協同組合原論をその對稱として展開した。従つて、その成果の如何は別として、本書が生れるために、近藤氏の著書に多くの、而も重要なヒントを與えられた」と。また、井上氏の著書は「近藤康男氏の名著協同組合原論に於て手薄に取り残されていると思われる點たる、協同組合の日本的特質を闡明すること」をその目的とされたものである。

以上四氏の著書は、昭和の初期、日本の産業組合運動がのこした協同組合の大きな學問的勞作であるが、それが、右にみられたように、それぞれ一連の血のつながりをもつて生れている。そして、それが終戦後、農業協同組合の胎動とともに、いち早く改訂版として再び刊行されるにいたつた。しかも、組合一般理論の勞作としては、今なお、この四書がその指導的地位をしめている。

終戦後における日本農村の民主化は、農地改革、農業會の解體、農業協同組合の設立という一應の段階をふんでおしすめられてきた。したがつて、農業協同組合に關する文獻も、この一連の關連性においてみなければならぬが、このような見地にたつて、しかも農業協同組合を主體にとりあつかつてゐる文獻はよりよりよつたるものである。僅かに新井義雄氏の「農民組合と農業協同組合」、兒島俊弘氏の「土地と農業協同組合」をあげるにすぎ

ない。この面における農業協同組合の理論的勞作は、今後にまたなければならぬ問題が多くのことつてゐる。農協運動の實踐的面からも、かかる方面の理論的勞作を要求してやまないものがある。それは、農協運動の分野が農作業の共同化、農地の造成、改良、管理、または農業水利施設の設置と管理（農協法第十條による）等の新しい種目に擴大されて考えられ、それが従來の流通部門擔當の協同組合理論と如何に吻合し發展せしめられるものであるかという理論の迷路にきているからである。それに對する答は、日本農業の現實の動きを協同組合との關連性のもとにとらえ、これを理論的に整理することによつてはたされるであらう。今後の農業協同組合の理論的究明はこれにむけられてゆくものと思ふ。

## 二 組合經營論

青木 一巳著 農業協同組合の經營

本山 悌吉著 農業協同組合經營監査

組合經營論についての文獻は以上の二書のほかに見あたらない。これまでの日本の農業協同組合（産業組合から農業會への系列をもつ）が、國家への依存によつてはじめてその經營がなりたつてきたということ、すなわち、經營の自主性がなかつたということとは、組合經營論の論争を、このように低調ならしめている。

しかし、これからの農業協同組合は國家の行政からきりはなされ、その經營はみずからの力ですすめられてゆかなければならぬから、組合經營の創意工夫は組合運動の實踐面からつよく要求

されてくるであろう。

一般の資本主義企業の経営論は事業管理がその主要な問題であるが、組合経営論は、この事業管理論のほかに、さらに組合員管理の問題が重要な地位をしめている。すなわち、組合員という大衆相手の事業経営であるところに大きな特色をもっている。なお、そのほかに組合の経営は零細で、しかも各種の事業が複合しているという特色がある。ここに、組合経営論としてさらに考察しなければならぬ多くの問題がひそんでいる。

### 三 組合實務論

海住 實著 農業協同組合の計理

笠原 千鶴著 農業協同組合簿記

鈴木 忠勝著 協同組合の能率的な事務の執り方

新井 義雄著 農業協同組合必携

葦原 米藏著 農業協同組合監査入門

中島 光司著 農業協同組合の簿記

農業協同組合研究會編 農業協同組合實務講義録全三卷

戦時中における農業會の會計のびんらんはその極に達し、これらの整理記帳は、終戦後の大きな課題となつていた。この要求に應ずるため、組合實務論の文献は、終戦後以上のように多數刊行せられてきた。しかも、これらの著者は、ながく組合経営の實務にたずさわつていた経験者で、その経験の果積が、この要求に應ずることになつたのである。そして、これら實務論者は、現在さらにその研究の分野を經營分析の問題にひろげつつあるから、組

合經營論との関連性のもとにその成果があらわれることと思う。最後の農業協同組合實務講義録は實務論を主體にしてはいるけれども、アプテーターの組合問題を數篇のせている。そのうち辻誠氏の「農民組織十六原則論」は農協組織の今後の在りかたを論述し、大くの示唆をあたえている。

そのほか、歴史的研究として奥谷松治氏の「日本協同組合史」、辻誠氏の「海外に於ける協同組合の發達」、法律問題としては農林省農政課編「農業協同組合法の解説」をあげることができる。

(角 玄)

## 農家主食消費量調査結果概要

農林省統計月報第二二〇號

(昭和二四年一月) —

昭和二三年五月一日に實施した農林省統計調査局の農村現地報告の集計結果たる標記の調査は、わが國農家の主食消費量の傾向を把握するものとしてきわめて有用である。昭和二二年以來全國的な榮養調査が實施されているが、範圍は二十數ヶ村であり、その位置も都市近傍に限られており、調査對象は必ずしも農家だけに限らないから、生産者がどれだけの食糧をとつているかは明かでない。本調査のサンプリングの方法は完全なそれではないが、